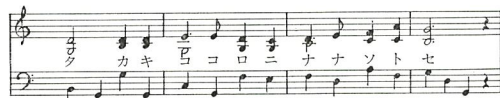
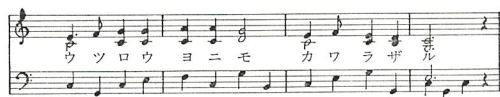


二つの曲の物語

同志社勤労報国隊の歌



大 島 襄 二

第一の曲、それはもう二十年の歳月の向うに、戦争の記憶と共に消えて行こうとする思い出話だ。だが、同志社女子部の戦中派の卒業生の中には、この物語りに懐旧の情を新たにする人もあるのではないかしら。

私が初めて同志社女子部の教壇に立ったのは、まだ京大の研究室に籍をおいていた昭和

十九年の春のことである。最初の授業では、お互い同士お喋りをやめないお嬢さんたちを、どうしたら良いのか術なく暫し黙りこんでその方を見やっけているしかなかった。また地理の授業なのに「地人論」の話から内村鑑三論に及んで、たまたま授業を見に立寄られた片桐校長も足を留めて聞き入ってくださったこともあった。官公立学校教育者の私に取って毎朝の礼拝というのが羨ましくて、出講日でない日にも礼拝だけは出席してから京大へ出勤したものだ。

こういう思い出に充ちた生活も、一片の召集令状によって、突如、終止符が打たれることになる。そして舞鶴の海兵団で発病、秋には福岡の自宅で脊椎カリエスの身を養うことになる。私の人生の急転回と共に、かりそめの教え子たちも学窓から工場へ動員されるといふ、歴史の転換期にさしかかった。私の病床への慰めと励ましへの便りの中から、彼女たちの刻々の生活の変化が読み取れる。勤労動員!! 健気、というべきその言葉が、病床の私に取っては、何か胸を刺すような、悲壮な語感でしか受止められなかった。どうしてだか判らない。が、その感じは私の病氣との闘

いの中に共鳴する音であった。「今宵また寝ねられぬらし背の痛み耐えんとすれど涙にじみ来」という短歌に、病気の苦痛を訴えた當時の私だったが、工場で働く女生徒たちに激励のうたを贈ろうと思つたのは、何か自然の勢いのようなものがあつた。

仰臥したままの病床生活の中で、その寝つかれぬ夜々に少しずつ作詞したのがそのうたであり、幾らか気分の良い日々には口ずさんでは譜に書き取つて行つたのがそのうたである。でき上つて行くうたを、枕頭の母が看病の手を休めて隣室のオルガンで奏いて見られる。気の済まないところを少し直しては、また奏いて貰う。こうしてでき上つたうたに、母が詳しい手紙を付けて片桐先生に送つた。学校では中瀬古和先生が更に曲をアレンジしてくださつた。「動員先の生徒たちに配りました」という校長先生の手紙、そしてほどなく、「工場の昼休みに皆あの歌を合唱しました」という手紙が伊丹の工場のアドレスで来たとき、病人は何よりも慰められたものだった。……もちろん、題名からしても、歌詞からしても、平和のめぐり来つたいま、再び歌われることのないうたとなつた。そし

て私自身では遂にこの合唱を一度も聞いたことがないというめぐり合せである。曲そのものには罪があるわけではないのに、と、何だか天逝した愛児とでもなぞらえられそうなかの歌を、二十年の時の流れが浄化してくれたこととして、もう一度だけここに披露しようと思つた次第である。

同志社勤労報国歌の歌

一 禁裡の松の とこみどり

移ろう世にも 変らざる

高きところに ななせよ 七十年

磨きしまこと 示さんと

誇りを胸に 今立ちぬ

同志社勤労報国歌

二 望みと愛と まことをば

一つに結ぶ わがしるし

直きところに しきしまの

大和ごころ 照り映えて

高鳴る胸に 今たちぬ

同志社勤労報国歌

三 ひたいに汗は 玉なすも

指は油に まみるるも

赤きころの 一すぢに

力のかぎり 励まんと
誓いを胸に いま立ちぬ

同志社勤労報国歌

二

第二の曲、それからでももう十年たつていゝる。しかしこの十年前は、つい最近のことのよう、で、むしろ、時の流れの速さに改めて驚くという十年だ。戦争の傷も癒え、私も健康を回復して、岩倉の同志社高校に再び咲いていた。共学制度に改まって第三年目という、岩倉の新生の意気溢れる頃だった。

晩秋の月冴え渡る郊外の一晩だった。僚友の並河純氏と私は、さつきからもう何遍も同じ道を往復したりしながら、何とないロマンティズムに浸つていた。われながら不思議な夜だった。慌しい筈の毎日から、その数時間だけが全く切り離されているようだった。高野川にかかる花園橋のあたりから、岩倉の変電所の横を通つて、叡電の八幡前の方へ、寮歌でも歌つて歩きたいような、そう、正にそんな歌のほしい夜だった。「そうだよ、ドンチのファイアーを囲んであれだけ盛り上りながら歌がないんだからなあ。」「なぜ、皆

白鷺飛びかう

の歌える良い歌がないんだらう、すぐにつまらん替え歌になって」。「旧制高校の寮歌のよ
うなものが今の高校生にもあると良いなあ」
岩倉愛唱歌の公募というアイデアは、生徒
会の会長以下の努力で急速に形を整えて行っ
た。先生方にもそのための委員会が構成され
てそこで選考がなされた。だからその間の事
情は、委員であった中堀愛作先生、久永省一

そのまま淡色の水彩画を偲ばせるような名作
である。選考の経過報告会で駒井先生のお名
前が読み上げられた時、生徒諸君も先生方も
心からの拍手を惜しまなかったものだ。
ところがそこで委員会はとんでもない事を
考えつかれた。その作曲を私に命じられたの
である。もう学年末も迫り公募の時間がない
と言われる。専門の音楽の先生でない方が愛

先生、それに並
河純先生あたり
に語って頂くの
が当を得ている
かも知れない。
幾篇かの応募作
品を、投稿者の
名を伏せて審議
し、さて蓋をあ
けてみると当選
作が駒井義明先
生の投稿だった
のも不思議だっ
た。岩倉の風物
を描いたこの美
しい抒情詩は、

唱歌の趣旨にふさわしいといわれる。

美しい原詩を描いた曲が潰してしまうことは
よくあることだ。私は私なりにこの詩のイメ
ージに似つかわしいメロディーを作り上げる
ことに細心の努力をしたつもりだ。色調の鮮
かな油絵ではなく夢のような水彩画なのだ。
遅ましい生活の息吹きではなく和やかな風物の
描写なのだ。応援歌の努漕ではなく愛唱歌と
いうそよ風なのだ。そして私が作曲したとい
うよりは、駒井先生原詩がこういう曲を導
いたような感じで、岩倉愛唱歌は誕生した。

七・七・七・七という短い歌詞なので、春
と夏、秋と冬、と二節ずつを組合せて曲に変
化をつけ、同じ歌詞の序節と終節を、曲も同
一にした。基調となるメロディーの繰返し
と、その間に挟まれた変化部分との組合せは、
駒井先生の歌詞のとおり、白鷺がそこに飛び
交うような調子に仕上がって、私自身、この曲
には喜びと安らぎを覚えていた。

献堂成ったばかりのチャペルで卒業式を守
った昭和二十九年度生の諸君は、バック・ミ
ュージックにホサナ・コーラスのこの合唱を
聞きながら「聖年に立てり、我等が母校」の
思いも新たに巣立って行った。音楽会に運動

会に、ホサナや器楽部が奏でてくれるこの曲を、幼かった私の子供たちもすぐに覚えて、ホーム・ソングのように口誦んで育ったものだ。そして私の十年余の岩倉の生活との別れの時に、何か記念品を、と言ってくださった高橋勘校長に、それでは愛唱歌をホサナに込んで貰ったテープをと所望して、金田義国先生の指揮のその合唱が、この方は何遍でも聞くことの出来る記念品になっている。

岩倉愛唱歌

- 一 白鷺とび交う 岩倉の野に
聖らに立てり われらが母校
- 二 庭の桜は 吹雪に散つて
若き瞳に 希望は光る
- 三 緑したたる 宝が池の
さざ波ちらし オールはすべる
- 四 高いポプラの 梢をかすめ
岩倉ドンチの こだまとよめく
- 五 雪にぬかるむ 比叡のもとに
春を待つらし みちの若草
- 六 白鷺とび交う 岩倉の野に
聖らに立てり われらが母校

(関西学院大学文学部助教)

時間割

大学教務課が授業時間割を組むとき、教授方から注文があつて朝の第一時限がきらわれ、事務担当者はその編成に苦心をするらしいが、同様な問題は新島先生在世中からあつたとみえ、当時の国学教授松山高吉宛この問題に関する新島書簡が見出された。松山氏の女、神戸女学院の松山初子女史の所蔵で、難波院長を通じて、史料として紹介を受けた。

書簡は巻紙九十四センチ、三十四行に墨書したもので新島公義氏の代筆である。公義氏の書簡と解されぬこともないが、受取人松山氏の自筆朱書で「故新島君の手紙」と端書がある。全文下記の通りであるが、授業を午前中にまとめてほしいとの申出に対し、出来ぬ、学校事情も理解してほしい。ただし御都合もあろうから午後にとまとめると申入れたものである。

前刻時間割に付御伺ひ申候処、午前のみを希望するは何れの教師も同様に御座候。或る教師のみ毎年午前に限ると云ふことに付ては兼て教員間にも不安あり又生徒の便を計らぬと云ふことに付ても前年より不平あり、今年も同様と存候に付、此辺御觀察之度、小生に於ては素より一点私なきこと故、教員生徒何れもの便益を計り度。就いては他教師と同様午前午後とも御教授ある様叶はゞ同志社教育の為に悦ふところに御座候。然れとも御都合もあること、察し候に付、本期は重に午後には御教授相願度、時間割を編成いたし度、此辺今一応御再考あらば大幸之至に御座候。右早々頓首

九月十三日

新し満

松山先生

(註) 松山高吉―越後の国学者、神戸でデヴィスより授洗、聖書と訳の助手、詩篇の名訳は特に彼の功績、讚美歌四一五と四四〇は彼の作。(史料編集所)

クラップ先生のこと

鴛 淵 邵 子



クラップ先生といえば御存知の方も少ないと思うが、先生は四十年近くの間、同志社女子部で宣教師として音楽教育に専心し、特に女子大学音楽専攻創設時には専攻主任として、その基礎固めに力を尽くされたので、先生と音楽専攻との関係は切り離せないものがある。去る一九五七年四月に御引退後、現在は米国オレゴン州ポートランド郊外のウェストリンに悠々自適の日々をお過してである。今秋同志社創立九十周年に再び同志社をお訪ねになる予定である。その先生をお迎えする心準備の始めとして、先生とは特別に深いつながりのあった数多くの思い出をつづつてみたいと思う。

クラップ先生は私が生れる前から私を御存知の方の一人である。というのは、母が女專時代に先生にピアノを習い、卒業後学校に残り結婚後もずっと課外でピアノ指導を続けていたので、先生にはとても親しくして頂いていたからである。さて、その先生が直接私とおつき合ひして下さった最初の思い出は四才の時のことである。その年の春から母の手ほどきでピアノの稽古を始めた私を、夏のある日、先生はお宅に連れてゆき聴いて下さった。椅子に小さい座ぶとんを重ねて抱き上げて坐らせ、奏いている写真をとったり、うちわであおいだり、大きな先生が小さい者のためにいろいろ世話をやかれた。何を奏いたかは思い出せないが、先生はごほうびにアメリカのピアノの本と人形を下さった。

次の思い出は幼稚園を終る頃のことである。当時作曲家兼指揮者のロシヤ人、チェレブニン氏が同志社にクラップ先生を訪問された。その機会に栄光館で音楽会が催され、つづいて同氏が先生の生徒たちの演奏をきいて下さった。公開レッスンの形式のものであったが、私も特別に奏かせて下さった。とても喜ばれた同氏より、氏の作品数曲の写真版を頂いた。先生は嬉しさに溢れて、大きな体で私を抱擁して下さった。

その後、小学校三年から五年の時に、先生がピアノのレッスンをして下さった。私は京極小学校から毎週一回、御所を通り抜けて女子部正門から栄光館正面の時計塔下の先生の部屋に通った。先生のレッスンは特に厳しかったという記憶はなく、どちらかといえば割合楽しく時が過ぎて行ったようであった。レッスンは、バッハの曲は全部片手づつ完全に暗譜し、沢山の音階練習と、他の曲も全て暗譜して仕上げるというやり方であった。先生は美しいメロディの個所は、ある時はピアノを奏きながらうたい、ある時は奏かないで「そこ、きれいなメロディ。だいにだいに」とか「音、かわいがって下さい」などと

おっしやって、お顔を上にして首をのばし、少し笛のような声でうたって示された。また、リズムミックスなどでは手を叩き、あるいは「いろいろの(色々の)おどりあります。ここはこのよな踊りです。どぞ(どうぞ)見て下さい」とピアノの横で踊ってみせるなどして、とても熱心に教えて下さった。そして、レッスンの度に「私の孫です」とおっしやって可愛がり、期待をかけて下さった。

このように小さい時からピアノをやり始めた私であったが、一方小学三年の頃よりバイオリンも習い出した。始めはピアノをやりながらバイオリンもという二本立で行く積りであったが、しばらくの後、バイオリンの先生



のすすめもあってバイオリンの方を主にして行くとういうことが決められた。

このことをクラブ先生に母が話した時、先生はたいそう歎かれ、「私、バイオリンのせんせ(先生)にはなします」とお怒りになったそうである。実際、バイオリンの先生とお話し合われたそうであるが、その結果はともかくとして、私にピアノリサイトをさせようとまで期待していられた先生にとつては、これは無理もないことであつたと思う。ピアノは妹がすることになった。

2

小学校の頃のもう一つの思い出にクリスマスページェントがある。今日の女子中高において盛大に行なわれているように、当時の女子部においてもページェントは一大行事であつた。先生はその総指揮者として全ての音楽と登場人物の動作の指導に精力的に働らいていられた。イエス様の降誕に際し、羊飼や三人の博士たちにつづいて子供たちが捧げものを持って主を拜みに行くことになつていた。私たち姉妹や他の先生方の子供たち多勢が、ユダヤ風の衣裳を着せられて、ぞろぞろと衆

光館ステージに上つて行った。足首までの長い衣裳をつけて歩いて行くのは私たちに余り感じよいものではなかった。先生は歩き方や、一人一人どの辺に立つか、どのような動作をするかなど、いちいち御自分でやってみせて細かく教えられた。無事ページェントが済んだ後は大喜びでかけて来て、「よく出来ました。ありがとございました」といって大きな柔らかな手で握手して下さった。とにかく先生は一つ一つのことを、ほんとに真剣になつて私たちを導かれた。

先生がステージで演奏されたことはほとんどなかったように思うが、一度ドイツ人のバイオリニストとソナタの演奏会をされたことがあつた。ベートーベンやブラームスのソナタを演奏されたが、やはり顔を少し上にして、眼鏡を時々押し上げながら一生懸命奏いられた先生の姿を今も眼前に浮べることが出来る。おぼろげながら、バイオリンとピアノの合奏の面白さと難しさを、その時に教えて下さつたように思われるのである。

その後間もなく太平洋戦争のために宣教師の先生方は次々と帰国され、先生もカリフォルニアに帰つて行かれた。

終戦後はヒバード、ゲイン両先生と共に先生もいち早く同志社に戻られた。戦後二、三年の不自由な暮しの時代に、何かと私たちのことを心配して下さり、時々衣料や食料品などをわけて下さった。私がバイオリンをしていることについては、もうお気持も変わり、却ってそれを喜んでいられるようでもあった。

次には私の留学を何とかして実現させようと骨折って下さることになった。先生のお知り合いの学校や、かつてお教えになった学校などに問い合わせの労をとって頂いた。しかし思いもかけないことから私の留学校は決った。当時、私は数人の子供たちにバイオリンを教えて居り、子供のための教授法を勉強したいと考えていた。先生もそのことをご承知で、アメリカの家庭雑誌「Better Homes and Gardens」ののっている記事をもとに、アイオワ州立教育大学のシュナイダー先生に問合せをして下さった。シュナイダー先生は御面識のない方であったのに「私、このお方のこといと思います。手紙書きましよう」とおっしゃって、驚きと不安のためにしばし返答にと

まどっていた私を促して直ぐ手紙を書かれた。シュナイダー先生は教育大学で、子供の音楽教育について新しい試みを研究されていたのであった。アイオワからの返事はなかなか来なかった。教育大学入学許可の通知を手にしたのは、もうほとんどあきらめていた約半年後であった。クラップ先生も「これで私、ほんとに安心します。大へんにうれしいです」と大きな胸を何度も下してここにこなざっていた。

出発前の数週間は留学についての細々とした心配をして下さった。ある時は英語とアメリカの日常生活の勉強のためとして先生のお宅に泊めて下さった。その間にあちらの風習や人々の考え方などについての話をじゅんじゅんと聞かせて下さった。また、お宅で開かれる会合やバイブルクラスには努めて出席するようにならして下さった。

先生は私の留学中に引退されご帰国になっていたのであるが、私は留学を終えてアメリカを去る直前に、ポートランドで先生と対面した。五年振りにお会いした先生は、お年にもかかわらずますますお元気に見えた。積る話に花が咲いた後、私の演奏をお聴きになっ

たが、「演奏が大人になった」とたいそう喜んでほめて下さった。このお言葉をきいてはじめて私は、先生にご恩返しが出来たという感じで一杯になり、何ともいえないほど嬉しかった。この時にはチェロというすばらしい贈り物を下さった。これは先生がお若い頃愛用された楽器である。

帰国以来、毎年先生のお誕生日とクリスマスにはカードと共に、近況報告のお便りを送り、折に触れ音楽専攻のこと、あるいは卒業生のことなどお知らせしている。先生はそのような便りを殊の外待ちこがれ、楽しみにしている。先生からのお返事の文面には、先生が唯一途に純粹なお心でもって、音楽専攻と私たちの活動の発展を願っていられることがよくよく感じられるのである。もちろん、先生はもう八十近いお年であるから、時には先生のお考えと現代的な私たちの考との間に時代のずれを感じることもあるが、それは仕方のないことと思う。今秋来訪された時に、音楽専攻のありのままの姿と私たちの研究の成果をつぶさに見て頂ければ、それは私たちにとって大きな幸せといえるであろう。

(女子大助教授・音楽)